



岐阜大学機関リポジトリ

Gifu University Institutional Repository

Title	板垣退助遭難の芝居：明治十五年の作品を中心に
Author(s)	土屋, 桃子
Citation	[岐阜大学国語国文学] no.[38] p.[111]-[27]
Issue Date	2012
Rights	
Version	岐阜大学教育学部
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12099/44221

この資料の著作権は、各資料の著者・学協会・出版社等に帰属します。

板垣退助岐阜遭難の芝居

〔明治十五年の作品を中心に〕

土谷 桃子

一、はじめに

明治十五年四月六日、岐阜の地を遊説で訪れていた自由党総理板垣退助が、演説会場から宿舍に戻るところで刺されるといふ事件が発生した。犯行は、愛知県知多郡横須賀村の小学校教員相原尚駿の単独犯によるものであった。板垣の命に別状はなかったが、この板垣遭難の報は日本中を駆け巡り、全国を揺るがした。

この遭難事件については、『自由党史』（明四三、五車楼）に記載があり、また事件の現場である岐阜の『岐阜市史 通史編』『同 史料編』（昭五二、五〇）でも多くのページが割かれている。また、雑誌『濃飛人』（岐阜県人協会発行）の三三三号（昭四六・一）から三三五号（同四七・三）に連載された、建部恒三「板垣退助の岐阜遭難」(一)～(二)には、当時の岐阜の自由民権運動と事件前後の出来事が詳しい。

自由党総理が刺されたという衝撃は大きく、刺された時に板

垣が発生したとされる（実際にはそうではないという説が有力）

「板垣死すとも自由は死せず」の一文はよく知られている。板垣の怪我は、遭難後十日ほどで関西に移動できるほどで重傷ではなかったが、この一文に象徴されるような劇的な要素が強調され伝播されることにより、自由民権運動にある種の弾みをつけたと考えられる。

その役割の一端を担ったと思われるのが、この事件の芝居化である。^①この事件を題材とした芝居（以下板垣遭難劇と称する）としては、明治二十四年の川上音二郎一座の『板垣君遭難実記』がよく知られるが、事件直後と言ってもいい時期に、板垣の出身地の高知や事件の現場である岐阜でも、同事件を題材とした芝居が上演されている。本稿では、この事故後間もない明治十五年に上演された芝居を中心に論じていく。

二、板垣遭難劇の一覧

先行研究で指摘されたもの、そして筆者が確認した明治期の板垣遭難劇を一覧表に示す。²⁾

	外 題	上演年月日	劇 場	役 者
1	東洋自由曙 (あずまなだじゆうのあけぼの)	明15・6・30 ～7・25	高知・ 堀詰座	鶴五郎・錦蔵一座 (松本錦蔵、中村鶴五郎等)
2	花吹雪伊奈波の黄昏 (はなふぶきいなばのたそがれ)	明15・7・18 ～	岐阜・ 末広座	中村七賀十郎一座
3	花吹雪伊奈波の黄昏 (岐阜の夜嵐)	明15・8・18 ～	名古屋・ 宝生座	中村七賀十郎一座
4	好自由切籠白鞘	明15? (上演されず)	大阪・ 角座	中村時蔵、市川蝦十郎、 実川八百蔵
5	板垣君遭難実記	明24・2・5 ～	大阪・ 卯の日座	川上音二郎一座
6	板垣退助君岐阜遭難実記	明24・3・8 ～15	横 浜・ 鳥座	川上音二郎一座
7	板垣君遭難実記	明24・6・20 ～7・11?	東京・ 中村座	川上音二郎一座
8	自由党総理板垣退助氏岐阜遭難実記	明24・7・17 ～	名古屋・ 新守座	角藤定憲一座
9	巷説美濃夜嵐シ	明24・9・20 ～	京・ 南座	笠井子雲、山下柴舟他
10	板垣総理岐阜の春雨	明25・6	名古屋・ 笑福座	木村武之佐壮士一座
11	板垣総理岐阜春雨	明26・1	名古屋・ 音羽座	武知元良一座
12?		明27・6 以前	高知	
13?	(鮮血/自由礎) 板垣退助君之伝	明27・6・8 ～27	大阪・ 角座	中村友次郎、嵐市丸、 嵐市蔵、片岡燕童等

この表で明らかなように、板垣遭難劇の上演時期は二つに分割できる。一つは、事件直後の明治十五年、もう一つは二十四年以降の数年である。

十五年の上演は、記憶に新しい生々しい事件が舞台上で繰り広げられ、観客が興奮したことが推測される。時宜を逸せず一気の勢いで上演まで漕ぎ着け、自由獲得のために命も惜しまない英雄像が強調されたのであろう。

二十四年の上演には、もう少し複雑な背景がある。遭難時板垣が総理を務めていた自由党は、十四年十月に結成されたものだが、この自由党は十七年十月に解党している。十五年末から板垣が政府の肝煎りで外遊したことで求心力が弱まり、党が弱体化したと、福島事件(十五年十一月)をはじめとする、一部の急進派の暴走があったことなどが理由である。自由民権運動はいったん下火になった。

しかし、十四年の勅諭で国会の開設が約された二十三年が近くにつれて、再び政党活動が活発化しはじめる。かつての自由党は、大同団結運動や愛国公党(二十三年五月)、立憲自由党(同年九月)を経て、二十四年三月に新たな自由党として再出発する。このとき、総理に推戴されたのが板垣である。この時期には、第一回衆議院議員選挙が実施され(二十三年七月一日)、第一回帝

国議會在開かれ（同年十一月二十九日）、国会や政党に世間の耳目が集まりやすくなっていた。このような状況のもと、板垣遭難劇は復活する。

板垣遭難劇を演じる役者側にも、社会状況が反映されている。十五年の上演（表1〜4）は、名前から類推するに、旧来の歌舞伎に縁ある人々によるものであると考えられる。一方、二十四年以降の上演（表5〜13）は、12、13を除けばいわゆる壮士芝居の一座によるものである。³⁾「壮士（書生）」とは、政治活動に携わる青年で、野党の政治主張を広めるための言論活動をし、中には過激な行為に走る者もいた。そのような中、民衆に訴える手段の一つとして始められたのが壮士芝居（書生芝居）である。壮士芝居は、のちの新派につながると思われるもので、自由党壮士角藤定憲が、二十一年十二月に大阪の新町座で旗揚げしたのが始まりとされる。角藤の旗揚げには中江兆民の後押しがあったという。

壮士芝居は「芝居」とはいうものの、演劇としてのレベルは高くなく、役者が勢いよく舞台上で動くことが目新しく、観客を集めていた。喧嘩の場面で勢いあまって本当に殴ってしまい、相手の鼻血がたらたら流れるのを観て観客が大喜びしたなどという笑い話も伝わっている。壮士から政治家になったもの一人もいないという事実が示すように、芝居には政治的内容の深さがある

とは考えにくく、彼ら自身にも自由民権運動に対する信念があったかは疑わしい。

同じく自由党壮士の川上音二郎が、角藤に続いて壮士芝居の一座を結成する。川上一座は二十三年八月の横浜・萬座で旗揚げするが、⁴⁾それから間もない時期に公演した『板垣君遭難実記』は、大阪（表5）、横浜（表6）で成功し、東京の大劇場中村座での上演（表7）にもつながった。川上は、長らく求められていた憲法および国会が実現した段階で、過去のドラマチックな板垣遭難事件を舞台に上げたのである。当然、この事件を自由党の宣伝に使うという計算もあったであろう。

このように、板垣遭難劇は、社会状況を反映して、上演時期が十五年と二十四年頃に集中し、前者は歌舞伎、後者は壮士芝居と概括できる。次章以降、明治十五年の作品について詳しく説明する。

三、『東洋自由曙』（高知・堀詰座）

『東洋自由曙（あずまなだじゅうのあけぼの）』は、高知の堀詰座にて、明治十五年六月から七月にかけて上演された。堀詰座は、『高知県史 近代編』（昭四五）、『高知市史 上巻』（昭三三）によると、十四年十二月に開場した劇場である。

作者は坂崎斌（紫瀾）である。坂崎は、土佐出身で、明治六年、板垣退助の愛国公党結成に際して参画し、民権運動に関わり続けた人物である。のち、高知の新聞『高知新聞』『土陽新聞』で筆をふるい、坂本龍馬を主人公にした小説『汗血千里駒』を新聞連載した。また、民権講釈というものを思いつき、自ら馬鹿林鈍翁を名乗って興行もしている。いわば、民権運動と文筆活動をつなぐ立場にあった。

倉田喜弘『近代劇のあけぼの』および『高知新聞』（十五年七月二〜十二日）、『土陽新聞』（同二十二〜二十六日）、『高陽新報』（同十八〜二十三日）の記事によると、同作のあらすじは以下の通りである。登場人物名は、板垣退助が稲垣大輔、相原尚斐が相原尚貞のように変更されているので、役名の後に実名を括弧内に示す。

【東洋自由曙あらすじ】

第一幕 名古屋古道具屋の場

古道具屋の主人が短刀を手入れしているところへ、相原尚貞（＝相原尚斐）が人力車に乗って登場する。相原は短刀を購入するが、『明治日報』を懐から落としていく。

古道具屋の小僧が『明治日報』を持って相原の後を追いかけて

きた。相原は稲垣大輔（＝板垣退助）を慕って岐阜の懇親会に行くと言。小僧は『明治日報』を相原に返すが、官権の肩を持つ『明治日報』を持っている相原が、民権の大將稲垣を慕うことを不審に思う。岐阜へ行って稲垣を短刀で刺すのではないかと思に至る。

第二幕 岐阜玉井屋の場

相原は玉井屋に宿泊するが、その使用人おさきが相原に好意を持つ。おさきに気がある番頭も絡んでくる。

新聞記者三毛田（＝岐阜新聞記者池田豊志知）がやってきて意気投合、話の花が咲く。相原は三毛田に稲垣を刺す決意を語る。そこへ宿の番頭が出てきて、この玉井屋は稲垣様の宿所になったから、宿替えしてほしいと頼む。三毛田は、同じ人間なのに稲垣だけを特別扱いするのかと憤る。

相原は、稲垣の顔を確認しようと、稲垣の部屋をうかがう。部屋に駆け入ろうとしたところ、おさきに見つかったので、彼女を蹴倒す。その時、おさきは相原の懐中の短刀を見る。相原は、稲垣側近の三輪田（＝岩田徳義）に見咎められるが、稲垣に会いたいのだと説明する。濃飛自由党の紹介がないと駄目だと断られる。

第三幕 分力町料理屋の場、松葉屋裏門の場

自由黨員が芸者とたわむれている。黨員の一人大倉と芸者八重吉は、明日の準備があると言いながら仲睦まじく一室に入っている。相原と酒を飲んで酔った三毛田がこの料理屋の近くを通る。

八重吉をよく思わない仲居おかんが三毛田に耳打ちをすると、三毛田は大倉・八重吉の部屋に踏み込み、新聞記事にするぞと脅す。

松葉屋の裏門から帰ろうとする大倉と、三毛田、新聞社職工二名合わせて四名のだんまり。大倉が職工二名を投げて、迎えに来た仲間と無事帰っていく。

第四幕 中教院懇親会の場

相原と三毛田は懇親会会場に来る。案内を乞うと大倉が出てくる。大倉が面倒なやつが来たという顔をして中に案内入れる。

会場に現れた稲垣は、有志に歓迎される。稲垣はじめ一同が演説をするが、稲垣は咽喉が思わしくないため、途中で宿舎へ引き返すことにする。

玄関では、井戸の水を飲みにきたふりをした相原が潜んでいる。稲垣が玄関へ出て五、六歩行きかけたところへ、相原は「国賊待て」と声をかけ、短刀で刺す。そのとき稲垣は、「吾を殺すも自由は亡びぬぞ、狼狽者奴（うろたへものめ）」と大喝一声する。

大倉は血で染まった稲垣の上着を持って「君が自由の爲めに、かれし熱血に染りしこの衣装、末代までの記念（かたみ）なり」と絶叫する。

第五幕 高知有志浦戸丸へ乗り込みの場、旅館玉井屋門前問答の場、稲垣病床にて高知有志に物語の場、斎藤大倉密議の場、松葉屋にて大倉八重吉に詮議の場

懇親会の場で三毛田と話していた松葉屋八重吉が何か知っているはずだと疑いをかけられる。大倉は八重吉を問いただが八重吉は答えない。大倉に愛想を尽かされそうになった八重吉はかみざしで自害しようとする。仲居仲間がそれを引きとめる。

第六幕 勅使下向の場

勅使が稲垣の病室を見舞う。稲垣は恐れ入りながら礼を申し上げる。勅使が帰った後、自由党黨員一同は、これこそ自由の曙と歓喜して幕。

次に演じた役者であるが、高知地元の役者であつたらしい。主役級は中村鶴五郎（稲垣大輔）、松本錦蔵（相原尚貞）という役者である。両者の詳細は不明だが、当時の新聞記事からおぼろげ

に分かることがある。そもそも、この両名が同じ舞台上に上ることは珍しかったようである。

今度板垣君が岐阜の遭難一件を新狂言に仕組み近々に看板をあげる運び下題も唐紅乱の緒（からくれないなみだれのいとぐち）とまできまりしに何分にも役者が不揃ゆへ鶴五郎党と錦蔵党とを一座に連合して打ちたしと其周旋に取りかゝりしところ錦蔵は何あつても鶴五郎とは和睦が出来ぬと意地張出せしより折角仕組んだ大評判の新狂言もおくらにならうかも知れませんがそれとも上方から新顔の役者でも下つて来れば幕開きとなりませうが先づ今の處では泣き寝入同様な始末（後略）

〔土陽新聞〕明十五・五・二六

この記事によると、当初の芝居の外題は「唐紅乱の緒」だったようである。この時期以前に錦蔵、鶴五郎の間に何があったのか分からないが、両者の関係は思わしくない。「上方から新顔の役者でも下つて来れば」、すなわち両者にしがらみのない者がいればと望まれている。

その他に名前の挙がっている出演者は、和三丸、友治郎、我久十郎、市雀、市丸、鶴四郎、鶴寿、鶴丸、和三吉、錦六、錦舎、

玉児、鬼久之助、龍太郎、市光である。錦蔵、鶴五郎はじめとした彼らが高知の役者であることは、以下の記事（投書）から推察される。

俳優と云者は善をすゝめ悪をこらすの名を以て芝居を興行し見物人は其為にぞろ／＼出掛ける訳なるがことに婦女子の如きは皆俳優の髪の結様帯の結様着物の着やうかんざしのさしやう白粉紅汁のつけやうから立居振舞まで俳優の真似をする（中略）何に付け彼に付け婦女子杯只管俳優の真似をするものなれば俳優は婦女子の導く教師と云ふとも可なりこの頃土佐国の俳優杯は淫奔にのみ流れて（松本錦蔵は除く）婦人の楽屋に来る等の事度々ありて不正の廉も珍しからず其外女役者や三味線ひき等の不品行を挙げんには嵐市雀は嵐亀尾（今にては女房なり）嵐和三吉は嵐梅丸（今にては女房）（中略）嵐和三丸は村竹三雀松木（松本？）錦舎は村竹磯丸（中略）其外数ふるに違あらず此れみな衆人の知る所なれども当人は廉恥の心なく却て之を快樂とし意気揚々として道路を徘徊するは実に憫然ならずや加之高知新聞土陽新聞に不品行のかどにて出たる俳優は市川鶴五郎（鶴屋の親玉）嵐梶太郎（後略、傍線）（東洋自由曙）出演者（筆者）（「高陽新報」明十五・

これは、「土佐国の俳優」に詳しい者の手になる投書であろう。管見では、彼らの名前は高知の新聞にしか見られないことから、地元の役者による興行と考えるのが妥当である。

さて、肝心の芝居の評判だが、なかなか良かったようである。当時の新聞記事が全て信用できるわけではないが、『高知新聞』は七月二日から十二日まで連日劇評を掲載し、次に板垣遭難劇を上演する岐阜にもその噂が伝わっていた。

昨日の紙上に当地末広座にて板垣君遭難の演劇を興行する旨を掲げしが今又た聞く所によれば土佐国高知の堀詰座にては板垣君が岐阜に於て凶変に遭れたる顛末を仕組み東洋自由の曙といふ名題にて俳優は去月三十日より稽古に掛りしよし又東京新富座にても今の狂言を打ち上げ次第同じく脚色の新狂言を興行する積りにや同座の台帳を送るやうに或人より依頼状を出せしと社会の風潮以て見るべし（『岐阜日日新聞』明十五・七・十二）

新富座の件は六月二十七日の『高知新聞』にも記載がある。し

かし、新富座での上演は実現しなかった。政府と敵対する自由党総理を英雄扱いする内容が、首都東京で演じられるのは差し支えがあったのだろうか。理由は不明であるが、高知でのこの芝居の情報東京にも伝わっていたのは確かである。

四、『花吹雪伊奈波黄昏』（岐阜・末広座、名古屋・宝生座）

『花吹雪伊奈波黄昏（はなぶきいなきのたそがれ）』は、岐阜の末広座（明治十五年七月）、名古屋の宝生座（同年八月）で行なわれた。両者とも中村七賀十郎一座による上演である。作者は不明である。

岐阜の末広座、名古屋の宝生座、それぞれについて概略を記す。岐阜の末広座は、明治十年前後に伊奈波地域にあった芝居小屋である。当時、同地域には「伊奈波三座」と称された末広座、豊座、相生座が存在した。末広座という座名がつけられたのは、七年七月から八年師走までの間と推測されている。⁵⁰名古屋の宝生座は、大須に十一年に開場し、二十四年に焼失した。大須は、江戸後期から名古屋の五芝居の一つに数えられた芝居の中心地であった。⁵¹

本作のあらすじは、『岐阜日日新聞』に十五年七月十二日から二十二日まで連載された劇評から知ることができる。同劇評に沿っ

て以下にあらすじを示す。尚、本作の登場人物名は本名である。

【花吹雪伊奈波黄昏あらすじ】

○横須賀学校出立の場

相原尚駁が、自分の勤務先の横須賀学校校門前に現れ、板垣を殺害するという意志を口にする。偶然隣の茶店に止まった人力車の客と車夫の話から、板垣が岐阜に出立したと知り、相原は人力車で岐阜に向かう。

○名古屋門前町の場

相原は、名古屋の道具屋で七首を購入する。伊奈波神社は祭りの日で、大勢が神輿を担いでいる。警官が雑踏を整理している。

○玉井屋の場

板垣の宿泊先の玉井屋に、側近の内藤魯一や岩田徳義がいる。相原が訪れ、岩田に頼んで板垣に面会させてもらおうとする。粘り強く依頼するが、断られる。

○中教院の場

翌日の中教院。たすき掛けの相原は、抜き身の七首を持って玄

関横に忍んでいる。それとも知らず、板垣は玄関から出てくる。

花道方向へ立ち去ろうとする板垣を、相原は後ろから組み付いて七首で刺す。板垣は抵抗するが最後には仰向けに倒れる。相原が最後の一突きをしようとしたとき、玄関先に出てきた内藤は事の意外に驚き、相原に飛びかかる。党员も大勢出てきて、ついに相原は取り押さえられる。この間に板垣は起き上がり、縁先に腰をかけ、「方々心痛めなざるな、板垣は死すとも大日本の自由党は亡びませぬ」と言う。

○篠ヶ谷梅林の場

池田豊志智（岐阜日日新聞社員）は、前々日相原と話をしていいため共犯者として疑われる。自由党员は篠ヶ谷梅林を捜索して池田を探す。代言人田島鹿之助も共犯を疑われ、自由党员が玉井屋に連れて行くこうとする。

○鍵谷龍男寓居の場

鍵谷龍男（岐阜日日新聞主筆）の自宅に、龍男、妻お龍、娘お静がいる。一家は鍵谷の身の上を心配している。そこへ自由党员がやってきて鍵谷との面会を求める。妻お龍が立ちほだかり夫を引き渡すまいとするが、鍵谷が出てきて同行を了解する。お静が

鍵谷に取りすがる。

○福寿楼の場

福寿楼にて、池田が酒を飲んでゐる。検事局からやってきた巡查に応答し、裁判所に出頭する。

○玉井屋の場

田島、鍵谷の両氏が玉井屋にて自由党の内藤魯一、内藤四郎と論争を戦わせる。

○勅使の場

『岐阜日日新聞』の劇評は、板垣遭難の中教院の場以降の記載が極端に簡略になる。判事役もいることから、おそらくこの後に相原尚駁裁判の場面があったのであろう。高知の『東洋自由曙』からの影響は、筋立てを見る範囲ではないようである。

岐阜と名古屋の芝居の内容はほぼ同一と思われるが、外題には差異が一点認められる。名古屋の宝生座の芝居は、『歌舞伎新報』二五〇号によると、『花吹雪伊奈波黄昏』のほかに、『岐阜の夜嵐』とも呼ばれていたようである。

(略) 又大須宝生座は市川左木太郎中村能志太郎中村翫志中

村仲十郎狂言は前が宇都宮切は岐阜の夜嵐是は板垣君の事件を新狂言に脚色し物ゆる取訳大人気去十八日大入りなりしと

『歌舞伎新報』二五〇号、明十五・八・二七(傍線筆者)

『岐阜の夜嵐』という名の由来は不明だが、同題名の冊子が存

在する。名古屋で出版された全七丁の小冊子である。表紙、巻末(七丁表)には、以下の記載がある。^①

【表紙】

岩田寛和編輯

(角書)板垣君ノ凶変 岐阜の夜嵐 全

明治十五年四月

【巻末】

四月十九日御届

編輯兼出版人 士族 岩田寛和

愛知県名古屋区横三ツ蔵町二丁目三番地

(定価金三銭五厘)

板垣遭難事件があった四月六日から二週間弱で出版に至っている。編者の岩田寛和の詳細は不明であるが、板垣を称賛する言辞

が見えることから、自由党関係者であろう。『岐阜の夜嵐』という題名、相原の人物説明から始まり、名古屋の古道具屋で短刀を購入、岩田徳義に板垣との面会を依頼するが果たせず、といった記載順序の一致から、この冊子と芝居との関係が推測されるが、決定打はない。冊子は、実名が記され、芝居に見られるような脚色はほどこされていない。題名が共通するのが気になるが、現時点ではこの冊子と芝居の関係は明瞭ではない。

次に、演じた役者について考察する。岐阜、名古屋での役名・役者は、以下のように整理できる。

	役名	岐阜	名古屋
1	板垣（板垣）退助	中村七賀三郎	中村七賀十郎
2	相原尚駿	中村七賀十郎	市川左喜太郎
3	田島（田嶋）鹿之助（介）	中村七賀鶴	坂東（中村）のし太郎
4	池田豊志智	中村賀三郎	中村翫志
5	鍵谷（鍵や）龍男	坂東（中村）秀之助	市川左喜太郎
6	鍵谷（鍵や）女房お瀧（滝）	中村若次郎	中村三ッ菊
7	内藤魯一	坂東和志蔵	市川男女蔵
8	内藤四郎	中村七賀鶴	中村七賀六
9	岩田徳義	中村賀朝	中村賀朝
10	勤使西四辻侍従	中村登雀	坂東（中村）のし太郎

中心的な存在の役者は、「今日より末広町の末広座に於て催す中村七賀十郎一座演劇」（『岐阜日日新聞』明十五・七・十八）とあることから、中村七賀十郎であろう。出演者名には「七賀」が目立つ。『近代歌舞伎年表 名古屋篇』で筆者が拾った範囲では、七賀十郎の初出は十三年二月の橋座である。その後、同年三月新守座、十四年九月新守座、同年十月新守座、十五年一月宝生座、そして同年八月同座の板垣遭難劇となる。同じ時期の『近代歌舞伎年表 大阪篇』『同 京都篇』には見られず、『歌舞伎年表』によれば、東京でも名前が出てこない。その後しばらく見当たらないが、三十年一月の西栄座（名古屋）、同年九月の岐阜大垣の宝福座の興行に、七賀十郎の名前が見られる。⁹⁾

名古屋と七賀という二語から、一人の役者が浮かび上がる。四代目中村嘉七である。『新訂増補 歌舞伎人名事典』（日外アソシエーツ、平四）によれば、本名秋田七賀助、活躍期間は嘉永元年（一八四八）から明治十四年で、慶応三年（一八六六）より中村七賀助、明治七年より中村歌七のち嘉七と改めている。尾張名古屋の芝居にも勤めていた経歴がある。幼少から少年期を名古屋で過ごした坪内逍遙の「少年時に観た歌舞伎の追憶」（『逍遙選集 十二巻』春陽堂、昭二）の「第十章 実川延若と中村七賀助」には、「私は、或ひは即き、或ひは離れて、巧みに歌舞伎を淡化し、

現実化し、自然化し得て、而も作為をも舞台上の調和をも破壊するに至らなかつた俳優を、明治年間に求めて、上京以前には、嘉七の七賀助^① 上京後には九代目團十郎を憶ひ出すと言つておく。(傍線筆者)とある。名古屋で七賀といへば、彼のことが容易に連想されたであろう。また、明治七年から十四年の名古屋の芝居に、「中村七賀七」という名が頻出する。彼は、のちに中村知鶴に改名するが、二十六年九月二十九日の『扶桑新聞』の「名古屋俳優一口斬」に、彼について「名古屋の俳優で中村七賀七と云ふのがあつたが」とあることから、名古屋の役者である。時期的に考えても、名古屋に「七賀」のつく名前を有する役者が他にもいたと考えることは的外れではない。

ただし、漢字表記を手がかりとした調査には危険性がある。先に引用した『歌舞伎新報』二五〇号には、中村七賀十郎を指すと思われる「中村仲十郎」がある。「七賀」を「なか」と読んだと考えられる根拠には、前出の中村知鶴についての『扶桑新聞』記事の「七賀七」についているルビ「なかしち」がある。よって「中村仲十郎」の線でも今後探る必要がある。現時点では、「仲十郎」でも手がかりは得られていない。^②

さらに細い糸ではあるが、岐阜と中村嘉七もつながる。『岐阜市史 通史編 近代』一〇五六ページに引用されている、明治九

年一月の岐阜・末広座の番付には、中村嘉七の名がある。その芝居には、前掲の岐阜と名古屋の役名一覧表の10の中村登雀(岐阜の「花吹雪伊奈波黄昏」の勅使西四辻侍従役)の名もある。名古屋、岐阜で活動していた役者たちが「花吹雪伊奈波黄昏」を演じたのである。

彼らの岐阜での知名度を知る手がかりが、以下の新聞記事である。

人気といふは恐ろしいもので今度岐阜末広座演劇散らしが一枚加茂郡大田村の下町理髮床の軒下にフハリと掲げあるを同村の若者等が見付て此うちに坂東熨斗太郎中村賀三郎市川鯉三郎の三人があるが是は我村方でも大最肩俳優なれば何か舞台へ張り出さし(●)を遣るといふこと)せねばなるまいとて即今金を集めをるよし(『岐阜日日新聞』明十五・七・十五)

この記事に挙げられた役者三名のうち、岐阜の「花吹雪伊奈波黄昏」の出演が確認できるのは、中村賀三郎(池田豊志智役)だけだが、「我村方でも大最肩俳優」とあるからには、地域で知られる存在であったと考えてよい。前章の『東洋自由曙』と同様、この板垣遭難劇も地元の役者による興行であった。

五、二作品の比較

三章、四章で高知の『東洋自由曙』、岐阜および名古屋の『花吹雪伊奈波黄昏』の劇場、あらずじ、役者について述べた。本章では、二作品を比較しながら、芝居化の特色や社会背景を考えてみたい。

まず、両作品の共通点であるが、先にも触れたように、両作とも地元役者による興行であった。高知は、板垣の出身地であり自由党の本丸ともいべき地であり、岐阜は板垣遭難事件の現地である。いずれの地においても人々の関心が高いことは疑いなく、それぞれに板垣遭難事件を芝居化するに相応の条件が整っていた。事件の興奮が冷めないうちに、観客の興味が薄れないうちに、わずかに二、三ヶ月で芝居化したのである。しかし、内容的に交差する部分がないことから、両者は別個の芝居であると考える。

実際の板垣遭難事件には、女性が関わる側面はない。しかし、歌舞伎という形で芝居にするのであれば、やはり女性の登場人物が欲しい。それが、『東洋自由曙』では、相原に好意を寄せる玉井屋の使用人おさきと自由党员と親しくなる芸者八重吉、『花吹雪伊奈波黄昏』では、岐阜日日新聞主筆鍵谷龍男の妻お龍、娘お静である。芸者八重吉は、男に愛想を尽かされそうになってかみざしで自殺しようとし、娘お静は出て行く父に泣いて取りすがる。

観客の涙を誘いたい場面であろうが、その効果のほどはどうだったのだろうか。女性の登場が必須ではない壮士芝居になると、このような工夫は不要となる。

共通点をまとめると、時宜を逸さず舞台上げ、歌舞伎の形式を踏襲した作品として地元役者によって演じられた芝居ということになる。

一方、相違点はどうか。細かい筋立てに違いがあるのは当然だが、最も大きな違いは、前述した女性の登場のさせ方と、登場人物名の扱いである。高知の『東洋自由曙』では、板垣退助は稲垣大輔、相原尚装は相原尚貞で、本名を使うことを避けている。¹¹しかし、岐阜と名古屋の『花吹雪伊奈波黄昏』では、板垣、相原をはじめ、自由党関係者や岐阜日日新聞関係者も実名である。記憶に新しい事件を、実名で芝居することに差し支えはなかったのか。

記憶に新しい事件の芝居化という点、一連の西南戦争物が想起される。西南戦争の終結は十年九月だが、最も早い西南戦争を題材にした芝居は、十年十二月の『西南夢物語』（大阪・戎座）で、西郷隆盛は「西条高教」である。次いで東京・新富座の『西南雲晴朝東風』（十一年二月）では「西条高森（盛）」である。いずれも本名の使用を避けている。名古屋の橋座でも、十一年三月に西

南戦争物と思われる『(角書)評郷高盛/滝少将)西南電報記』が上演されているが、西郷の名は「評郷高盛」で、本名ではない。政府にとっては謀反人である西郷の名が芝居で英雄然として堂々と現れることは望ましくない。

では、『花吹雪伊奈波黄昏』では、板垣の本名は問題にならなかったのか。理由として、政府にとつての西南戦争と板垣遭難事件の重さの差があることが、まず考えられる。西南戦争は、一連の士族の反乱の最後にして最大の反乱であった。首謀者である西郷は命を失っている。一方、板垣は政府にとつて都合のよくない人物ではあるが、事件そのものは突発的なもので、政府にとつて直接的な痛手があったわけでもない。死した西郷に比べ、負傷しただけの板垣に、観客が過度の感情移入することもない。このような背景が考えられる。しかし、高知での『東洋自由曙』では、本名が避けられた。これは、自由党の本丸として政府が目を光らせていた高知では、用心していたと考えられないだろうか。作者の板崎紫瀾も自由民権運動に携わっていた。そのあたりの配慮はしたのである。一方岐阜は、事件の現場ではあるが、自由民権運動や反政府の気運という面では、格段の注意が要される地ではない。一地方における地元役者による興行であったため見過ごされた。そして、岐阜で問題にならなかった芝居を名古屋に持ってい

き、そのまま演じることにした。このように考えられる。

六、明治二十四年以降の板垣遭難劇

前章まで明治十五年の板垣遭難劇について述べたが、二十四年以降の壮士芝居(二章の一覧表の5以降)について簡単に触れておく。壮士芝居の板垣遭難劇というと、川上音二郎(表5、6、7)が知られている。彼の出世作であり、壮士芝居の代表作と言っている。川上音二郎の東京の大劇場初進出となった興行(表7)には、五代目尾上菊五郎がお忍びで観に来たということもあり、話題性も十分であった。十五年には東京の舞台の上ることのなかった板垣遭難劇が、選挙と議会が実現した二十四年には堂々と東京で演じられるようになった。

壮士芝居の創始者とされる角藤定憲は、後発の川上の活躍に押されるようになるが、彼も板垣遭難劇を名古屋の舞台に上している(表8)。芝居の前日には、大須宝生座で「自由政談演説会」も開いたとのことである(『扶桑新聞』明二四・七・十一)。題名が気になるのは、「巷説美濃夜嵐シ」(表9)である。「花吹雪伊奈波黄昏」の名古屋興行の別名であり、冊子も存在する「岐阜の夜嵐」と関連があるのだろうか。京都の『日出新聞』二十四年九月二十五日の記事では、「巷説岐阜夜嵐」に「いたがきしそうな

んいつけん」のルビが付されている。この芝居を演じた笠井子雲、山下柴舟の詳細は不明だが、二十四年十月に大阪で発足した演劇矯正会の会長が山下柴舟だったので、関西地区においてはそれなりの影響力のある人物であったと思われる。⁸⁾

事件の現場の岐阜が近いためであろうか、二十五年、二十六年に名古屋で板垣遭難劇の上演が続く。二十五年六月の木村武之佐、二十六年一月の武知元良の芝居についての新聞記事を拾う。

木村一座の書生演劇 名古屋市橋詰町の笑福座に於る木村武之佐一座の壮士演劇は思つたより割合の出来来兵児帯男子の演芸としては感服の外なけれど只木村文が震災義捐云々の自惚口上と梨園社会の親玉攻撃は止した方が優しならんと或人は云ひぬ（『扶桑新聞』明二五・六・七）

音羽座の壮士芝居 新年の初興行に橋詰町の笑福座で大当りをした武智一座の壮士演劇は今八日より南伏見町音羽座へ移り一興行なす由なる出しものは文明奇稽欺律裁判、板垣総理岐阜の村雨、明治人情書生氣質（『金城新報』明二六・一・八）

『扶桑新聞』の記事によれば、木村武之佐は、この興行を最後に画工になるべく東京へ向かったそうである。武知元良は、「新派古顔連」の一人（江戸千代吉『芝居と名古屋』中京堂書店、大八）と称される人物であった。名古屋地域の芝居にしばしば名前が見られ、岐阜での興行も、三十二年六月美殿座の「新俳優武知元良一座」が確認できる。⁹⁾

表13の『角書』鮮血／自由礎）板垣退助君之伝』は、板垣の伝記を芝居にしたものである。高知で人気があったものを大阪向けにアレンジしている。

角座の土佐芝居 同座の六月興行には土佐の役者市川市鶴、嵐市蔵、大谷友次郎などいふが乗込み板垣退助氏の伝を仕組みたる戦血自由の礎十幕を演ずる筈のよし併し土佐にて演じたるまゝにては余り堅過ぎるとの事より当地より作者魁玉助を土佐へ遣り色気をつけさせ大阪の人気に合ふやうにして六月五日から開場するといふ（『大阪朝日新聞』明二七・五・十八）

このように、遭難事件直後に上演が相次ぎ、その後音沙汰がなくなった板垣遭難劇は、二十四年から、憲法発布や国会開設に伴

い板垣が自由党総理になると、再び舞台上に戻ってきたのであった。

七、おわりに

本稿は、明治十五年四月の板垣遭難事件が、数ヶ月後に高知及び岐阜・名古屋で芝居化されていたことを取り上げた。それぞれの芝居のあらずじ、役者、評判等について説明し、両者の類似点・相違点を指摘した。また、板垣遭難劇が、十五年と二十四年頃の二つの時期に集中していることも指摘した。十五年は歌舞伎、二十四年頃は壮士芝居という形態の違いも顕著であった。

板垣遭難劇には、報道性と娯楽性の両面がある。特に十五年の芝居は、本稿でも触れた西南戦争物にも通ずる報道性がある。事件が色あせないうちに急いで芝居にすることは、記憶に新しい事件を舞台上で再現することで観客を呼べる娯楽性にもつながる。さらに、板垣を英雄として描くことで、自由民権思想を喧伝する道具ともなりうる。二十四年に自由党壮士によって板垣遭難劇が復活するのは、その表れである。報道性、娯楽性、宣伝性という特色を抽出することができよう。

板垣遭難劇そのものも興味深い対象であったが、今回の調査で知り得た高知や岐阜・名古屋地域で演じていた地元役者と思われる

の人々の存在も非常に気になっている。岐阜は地芝居の盛んな地としても知られており、それらとの関係も気になるところである。資料が限られることが予想されるが、調査と考察を継続していきたい。

注

(1) 板垣岐阜遭難の芝居化についての先行研究には、倉田喜弘『近代劇のあけはのく川上音二郎とその周辺』(毎日新聞社、昭五六)がある。

(2) 大正以降の板垣遭難劇の上演は、筆者の確認した範囲では、大正期はなし、昭和期に二度(昭和二年、二二年)ある。また、講談でも板垣岐阜遭難を題材にしたものがあるが、今回は芝居に限定した。

(3) 表12、13の芝居は、板垣の伝記を題材としたものらしいが、詳細は不明である。よって表では疑問符(?)を付している。

(4) 川上音二郎一座の旗揚げは、『演劇百科大事典』等では表5の大坂・卯の日座としているが、二十三年八月の興行が先行している。

(5) 「わがふるさと百年の歩み」『市政グラフ コミュニティぎふ』七号・一九八九春(平元)、『岐阜市史 通史編 近代』(岐阜市、昭五六)

一〇五五―一〇五七頁。

(6) 『近代歌舞伎年表 名古屋篇 第一巻』(八木書店、平十九)等。

(7) 『近代歌舞伎年表 名古屋篇』の場割は、『岐阜日日新聞』とは若干異なる(第一横須賀学校ノ場、第二 田代村子別ノ場、第三名古屋尾頭丁ノ場、第四伊奈波祭礼ノ場、第五井屋旅館ノ場、第六中教院閣

殺ノ場、第七田嶋鹿之助拘引ノ場、第八鍵屋龍雄拘引ノ場、第九池田
豊志智宿間ノ場、第十田嶋内藤弁論ノ場、第十一鍵屋自由党争論ノ場、
第十二西四辻侍徒勅使ノ場、第十三相原尚髮糾明ノ場。

(8) 筆者の所見本は、岐阜市立歴史博物館蔵本（原本）及び、国立国会
図書館蔵本（近代デジタルライブラリー画像資料）である。

(9) 岐阜大垣については、畑三郎「岐阜市映画館年表 明治三〇〜三三
年」（自筆手書き原稿のコピーを冊子にしたもの。岐阜県立図書館蔵、
成立年不明）による。

(10) 二十四年から二十七年にかけて名古屋に「姉川伸十郎」という役者
名が見られるが、関連は不明である。

(11) 出典を確認できなかったが、倉田喜弘「近代劇のあけぼの」（二二
頁）によると、大阪・角座でも板垣遭難劇（『好自由切籠白箱』）の予
定があったそうである（実現せず）。その作品では、板垣は北垣大助、
相原は秋原幸慶となっている。

(12) 『近代歌舞伎年表 名古屋篇 第一巻』 一四三頁。

(13) 秋庭太郎「日本新劇史 上巻」（理想社、昭三〇） 一一八頁。

(14) 畑三郎「岐阜市映画館年表 明治三〇〜三三年」。

参考文献

秋庭太郎「日本新劇史 上巻」理想社 昭三〇

茨木憲「壮士芝居と新派」『近代の演劇Ⅰ（講座日本の演劇5）』勉誠社

平九

伊原俊郎「歌舞伎年表 一〜八巻」岩波書店 昭三二〜三八

宇田友猪等「自由党史 上巻」五車楼 明四三

江戸千代吉「芝居と名古屋」中京堂書店 大八

大笹吉雄「日本現代演劇史 明治・大正篇」白水社 昭六〇

河竹繁俊「日本演劇全史」岩波書店 昭三四

倉田嘉弘「近代劇のあけぼの〜川上音次郎とその周辺〜」毎日新聞社 昭
五六

建部恒二「板垣退助の岐阜遭難（一）〜（二）〜」『濃飛人』三三三〜三三
五号 昭四六〜四七

坪内雄蔵（追憶）「少年時に観た歌舞伎の追憶」『追憶選集 十二巻』春陽
堂 昭二

野島寿三郎「新訂増補 歌舞伎人名事典」日外アソシエーツ 平四

畑三郎「岐阜市映画館年表 明治三〇〜三三年」岐阜県立図書館蔵 成立
年不明

藤吉留吉「自由党総理板垣君遭難録」春陽舎 明十五

武藤鏡浦「（板垣／遭難）自由の碧血」岐阜日日新聞社・西濃印刷株式会
社 大七

安田徳子「地方芝居・地芝居研究 名古屋とその周辺」おうふう 平二二

『近代歌舞伎年表 大阪篇 一〜九巻』八木書店 昭六一〜平七

『近代歌舞伎年表 京都篇 一〜十巻・別巻』八木書店 平七〜十七

『近代歌舞伎年表 名古屋篇 一〜五巻』八木書店 平十九〜二三

『岐阜市史 通史編 近代』岐阜市 昭五六

『岐阜市史 史料編 近代1』岐阜市 昭五二

『岐阜市史 史料編 近代2』岐阜市 昭五三

『岐阜日日新聞』見出し一覽」岐阜市立歴史博物館 昭六一

【高知県史 近代編】高知県 昭四五

【高知市史 上巻】高知市 昭三三

【高知市史 中巻】高知市 昭四六

【市政グラフ コミュニティぎふ 七号 一九八九春】岐阜市 平元

【新聞集成 明治編年史 五巻】本邦書籍 昭五七

【日本近代思想大系 18 芸能】岩波書店 昭六三

【演劇百科大事典】平凡社 昭六一

【国史大辞典】吉川弘文館 昭五四〜平九

【総合日本戯曲事典】平凡社 昭三九

【日本近代文学大事典】講談社 昭五二

【愛知新聞】

【大阪朝日新聞】

【歌舞伎新報】

【岐阜日日新聞】

【金城新報】

【新愛知】

【高知新聞】

【高陽新報】

【土陽新聞】

【扶桑新聞】

【日出新聞】

（附記）本稿は、平成二十三年度岐阜史学会大会における口頭発表に基づ
く。